

ナスの隔離土耕栽培法の開発  
 第1報 定植時期と継続栽培が収量・品質に及ぼす影響  
 石橋泰之・豆田和浩・八谷和美・森園寛治  
 (佐賀県農業試験研究センター)

Yasuyuki Ishibashi, Kazuhiro Mameda, Kazumi Hachiya and Kanji Morizono :  
 Development of growing technique in the isolating bed cultivation of eggplant.  
 1. Effects of setting tim and long cultivation on yield and quality

ナスの隔離土耕栽培技術は、省力・軽作業・マニュアル化を目的として検討を行っており、槽幅30cm、槽高30cmの栽培槽に配合培土を詰めて栽培すると、地床栽培の125%程度の収量が可能であることはすでに報告した。

そこで本報では、隔離土耕栽培の特徴を活かした新たな栽培方法としてナスの収穫延長による増収技術について検討した。

1. 材料および方法

供試品種は、穂木‘筑陽’台木‘赤ナス’を用い、6月に播種し、接ぎ木した45日育苗苗を購入した。購入後、直ちに15cmポットに鉢上げし2次育苗した後に隔離土耕栽培槽に株間50cmで定植した。栽培槽は槽幅30cm、槽高30cmを用い、杉皮4：粗穀堆肥4：田土2の割合の配合培地を用いた。培地内は温湯管で最低20℃を確保した。施肥は1a当たり成分量で元肥がN：3kg，P：2.57kg，K：3kg，追肥がN：0.3kg／月とし、継続栽培は追肥のみを行った。定植時期は1999年が①8/17②9/7③9/17，2001年が①7/27②8/27とした(試験1)。継続栽培は主枝を懐部から2節残して切り戻し、それぞれ勢いのある側枝を伸ばし主枝として収量、品質を比較した(試験2)。

2. 結果および考察

定植時期は、早くなるほど年内の収量が多く、8月中旬以前の定植では総収量が多くなる傾向であった。一方定植時期が早いと時期別収量の変動が大きくなりやすく上物率がやや低下するが商品率は大差なかった(第1表、第1図)。2001年は7月27日定植の収量が8月27日の122%となり、1999年は8月17日定植の収量が9月17日定植の111%となった(第1表)。

継続栽培は切り戻す時期によって初収穫までの所要日数が異なるが、7月に切り戻すと40日程度で初収穫が行え、1年株の初収穫より若干長くなり、6月に切り戻すと24～28日で1年株と同等であった(2001年)(第2表)。

継続年数は長くなるほど年内の収量が多く、1月以降の収量差が少ない(第2図)。一方、総収量は多くなるが、上物率が低下し商品率が低下する傾向だった。隔離土耕栽培では、定植時期の前進化や継続栽培が可能であり、ほぼ周年に近い栽培が可能である。しかし、今後は安定した草勢維持技術の検討が必要である。

第1表 定植時期の違いと収量・品質 (a当たり)

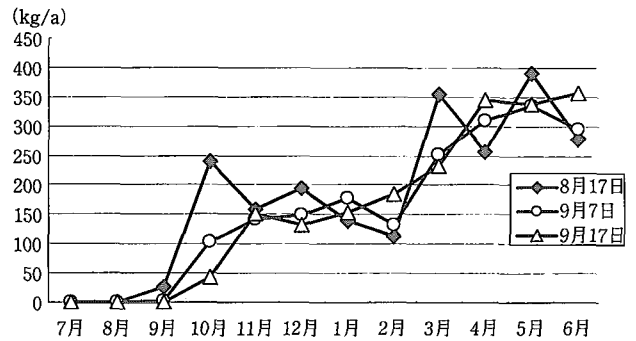
	定植日	8~12月	1~3月	4~7月	計	上物率	商品率
	(月/日)	(kg)	(kg)	(kg)	(kg)	(%)	(%)
1999	8/17	616	605	925	2,145	66.2	97.3
	9/7	395	561	940	1,895	63.7	96.3
	9/17	326	569	1,037	1,932	71.9	97.5
2001	7/27	884	482	846	2,211	61.4	94.5
	8/27	445	495	870	1,811	67.2	92.9

注) a) 商品率：(上物収量+中物収量) / 総収量。  
 b) 1年培土。

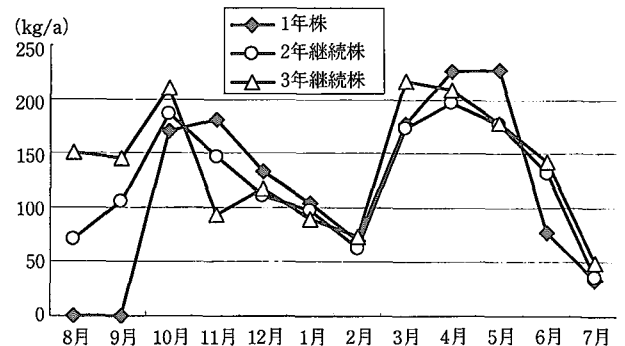
第2表 継続栽培年数の違いと生育および品質 (2001年度)

区	主枝切り戻し月日	収穫開始日	所要日数	総収量	上物率	商品率
	(月/日)	(月/日)	(日)	(kg/a)	(%)	(%)
1年株	—	10/1	35	1,563	62.3	89.3
2年継続	6/15	7/13	28	1,951	47.7	85.7
3年継続	6/15	7/9	24	2,097	45.6	83.8

注) a) 1年株の定植は8/27。  
 b) 1年株の所要日数は定植～収穫開始までの所要日数。  
 c) いずれの区も3年培土を用いた。



第1図 定植時期の違いと収量の推移 (1999年)



第2図 継続栽培年数の違いと収量の推移 (2001年)